

JOMF 派遣医師便り (2019. 5)

◆シンガポール◆

サル痘

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

5月初め、シンガポール保健省からサル痘の患者発生があったことが各医療者に通知された。(因みに各医療者への情報の通知は月に1~2回はあるため、それ自体は珍しいことではない。)

患者は20歳代のナイジェリア人で、シンガポールにナイジェリアから4月28日に単身到着した。4月30日に発熱、悪寒、筋肉痛、発疹で発症した。医療機関に最初にいつかかったかは明らかにされていないが、5月7日にTang Tock Seng病院に救急搬送され、同日、国立感染症センターに移送された。翌8日にサル痘に罹患していることが証明された。陰圧室で管理されている。幸い、患者の病状は落ちついているとのことだ。到着前に野性動物の肉を食する機会があったことが、感染の契機となったと考えられた。接触者の調査が行われ、9日までに23人が濃厚な接触があったとされ、天然痘ワクチン(サル痘と人の天然痘のウイルスは同じではないが類縁関係にある)を接種されるとともに潜伏期(5~21日)を考慮し、21日間隔離されることとなった。また、濃厚ではないが、接触があったと考えられる人たちは、最終接触から21日間、1日に2回当局から健康状態のチェックを受けることになった。

サル痘の初期症状は、発熱、頭痛、倦怠感など非特異的なものであるが、1~3日すると特徴的な水疱を形成する。顔面から現われることが多い。発症から3週間程で自然治癒が期待できる疾患ではあるが、流行すると特に小児では1~10%の死亡率があるので注意が必要である。ウイルス保有動物は猿の他、ガンビア大ネズミ、リスなどのげっ歯類とされている。動物から人への感染は稀ではあるが、噛まれたり、引っ搔かれたり、感染動物の肉を食べることで感染する。人から人への感染も限定的だが、咳で飛散するウイルスを含む水滴を吸い込んだり、水疱に直接接触したりすると感染する可能性がある。

サル痘は1958年に初めてカニクイサルで天然痘ワクチン製造過程で確認され、ヒトでの感染は1970年に初めてザイール(コンゴ)で確認された。その後、サル痘の人への罹患例の報告はナイジェリア、中央アフリカ、カメルーン、コンゴ、リベリア、シエラレオネからあり、コートジボアールからは人での報告はないが、サル痘が動物の間で認められている。2003年アメリカテキサス州で輸入されたげっ歯類から感染が広まり71名の感染者を出した記録がある。

シンガポールで感染が広まらないことを信じたい。

今回の件で、驚いたのは天然痘が撲滅されて40年近くたっているのに天然痘ワクチンがシンガポールで接種可能であったこと、及び、シンガポール政府の迅速な対応と情報の周知である。そして、改めて平常時からの感染症対策の意義と重要性を再認識した。